紹介

研究者ネット：被災地神戸（摂津）の神社

藤田 正*

阪神・淡路大震災後の被災状況と三年後の復興状況について神戸史学会がまとめている（『歴史と神戸』第37巻 第2号 特集 神戸の被災史跡と文化財）。その二年後の夏、なんとも落ち着かない、イライラした気分になり、私は被災地の神社・二百社ほどを歩いてまわった。被災地のコミュニティ復活の手掛かりが得られればの願いを込めて…。というのも地震後再興された祭りに心がときめいたからである。

1. 被災後五年

地震動への驚きに始まり、怒り、悲しみ、喜びなどの情緒を経て「萎え…諦め」に至った。が、「諦めることに飽きる」ことが起り、私の内にエネルギーが潜むことを知った。その後、被災直後からの心理的推移をまとめ（藤田 1996）、ボランティア、神戸市復興懇話会などの活動に参加した。一応の立ち直りである。この五年ほどの間は「神戸にいくとホッ」とし、神戸との間に確かな「感情的一体感」を感じた。それが私の行動の源であった。この感情的一体感は被災体験の共有から生まれた。それゆえに外部の人の適切なコメントにも「体験しないと地震は分からない」とまずは反発し、他方、震災を被災者同志一言語り合うとその人は仲間となった。ここにあるのは被災体験の有無を基準とするウチ・ソトの分離である。共感しあい、触れ合い、体感しあい、独りではないことをリアルに確認できる他者・グループが大切となった。ここで生じるグループ・ダイナミックスが感情的一体感を生み、被災者の立ち直りの基盤となった。が、この関係はリアルで、対面的であるが故に、常に別れを伴う。私自身も地震後五年間で尊敬していたボランティア関係の三人を病氣、事故、不注意で亡くした。死ではない別れを含めればたくさんの人と別れた。その度に「もっと話をしておけばよかった」といった悔いの念が起り、まるで歯の治療直後のような噛み合わせの悪い、イライラした気分になる。それが今の気分である。

さて、地震はソトからの非日常的な圧倒的な力で私たちを破壊しようとした。それに対して「個人としての私」はリアルな仲間と日常性の回復をすることで対抗した。が、その仲間との別れが日常的に起る。すると「当の相手のいない一体感」だけが残る。喪った人が大事な人であるほど、私の個人性は私のウチから解体されていく。残った一体感を思い出に昇華できればと願う。氷が水蒸気に昇華する時、水の分子は激しく動くという。「動くこと」に集中する。これが神社を「歩いて回った」理由である。動く中で地震後五年間の感情の一体感が「地震という自然」と「体験を共有する他者」、いってみれば外部からの脅威と感情の一体感を受身的に受け取ることから生じていたことに気付く。これは私自身の受動的構えである。以前社会心理学実験で、緊張と緊張解消の二つの過程が共存する状況で構えが変化することを明らかにした（藤田 1975）。この実験に要したのは精々一時間だが、地震動が緊張喚起し、体験共有が緊張解消を実現したと考えれば年単位で受動的構えが変化し始めたことになる。が、どこに向かって変化しているのかが分からない。これがイライラの理由である。

「変化が起る。何か新しい枠組みが生まれる」と指摘するだけでは不十分である。少なくとも「改変すべき古い枠組みの構造と新たな枠組みが志向する方向」が示され、それを実現するためのマネジメント過程が提起されなければならない。我々は受動的構え・感情ではない、能動的構え・情動にもとづく新たな枠組みを求める。ではどのような設計図を企画しうるのか。私が考えたいのは使い捨て型消費社会ではない循環型社会である。そのマネジメント過程については省略するが、循環は使用したモノを使い捨てせずに新たな価値を見出し利用することで成立する。被災者が形成した感情的一体感は「隣はなにをする人ぞ」式の従来の都市生活では「古い」として廃棄されてきたことである。が、これを使い捨て、廃棄されるコトを被災者は望んでいない。とはいえ、この感情的一体感のみを追及し、二者関係での応報性を求めれば、ウチ・ソトの境界が鮮明な、いわゆるムラのコミュニティの実現

* Masaru FUJITA
府立大阪女子大学人文社会学部人間関係学科

をマチに想定することになる。いうまでもなく被災地・神戸（摂津）はムラではなくマチだから、それは不可能である。つまり、この感情的一体感を剰余価値としてとらえなおし、新たなマチづくりのための情動的協働性を支える基盤に変えることこそが肝心である。このコトが都市型災害への教訓を成立させる。

2. 神戸（摂津）の神社

情動的協働性は感情的一体感という過去を踏まえながら未来を志向する。このことの大切さを現在の日常性を越えた被災生活が教えた。そしてまた、前世、来世の言葉が示すように宗教が現在をはみ出す時を提起している。それゆえに余震の恐怖におびえながら「神様、悪かった、もう勘弁して!」と祈った。この生活と宗教の重なりは天神さまへの合格祈願が代表的だが我々が行う行動に潜んでおり、時折姿を見せる。が、未来は現時点での事実ではない。故に物語によってしか語ることは出来ない。また過去の事実を全て言い尽くすことは困難である。ある目的に従って生じた出来事の幾つかを選んで物語化するしかない。古事記・日本書紀はこのような物語であり、そこには多くの神々が登場し、今も神社にいとされる。神話空間にはこのような過去・現在・未来の混然一体性がある。実は被災者もこの混然一体性を体験した。例えば、「(PTSDの)こころのケア」で有名になったフラッシュバックだが、日常生活が可能になった後の悲惨な震災場面のフラッシュバックだけではなく、余震の恐怖に怯える中で地震前の安全な神戸の風景もまたフラッシュバックされた。この混然一体性を物語化することで未来の神戸を見ようとした。誤解されては困るが私は神話が史実だといっているのではない。そこで「混然一体性からの物語化の仕組み」が参考になるのではないかということを主張しているのである。これが神社に注目した理由である。

神社の配置。これが検討の手始めである。まず寺院との比較で神戸（摂津）がマチ的であることを確認する。ごく素朴に寺院と神社の数を都道府県ごとに見ると、いわゆるマチ的地域（大阪、京都、滋賀、東京など）と思われる所で寺院が多く、反対にムラのな所（新潟、福島、高知など）には神社が多い。兵庫県には神社も寺院も共に多いのだが、兵庫県を構成する旧国領でみると摂津は播磨、淡路、丹波、但馬と異なり神社が多い。神戸市でみると神戸西方・旧播磨の垂水区・西区では神社が多く、最も大きな被害があった阪神間のいわば六甲山脈南側の海岸沿いの摂津地域では寺院が多い

（但し、山田村、住吉村と異称される北区・東灘区では神社・寺院はほぼ同数である）。つまり、激災地・摂津の地域特性はほぼマチ的といえる。さらに、穀神を祭神とする大歳（年）神社は摂津には殆どないが、摂津の西と北の地域には数多い。このことも神戸（摂津）を田を中心とするムラ地域とは考えられないことを示している。神戸（摂津）で見たマチの神社の特徴とは何だろうか。神社の境内には杜があり、そこで子供たちが遊んでいる。これが四国出身の私が抱く神社イメージである。しかし、生田神社が代表的だが摂津地区にある多くの神社境内は駐車場になっている。正直、違和感を感じた。ではここは神社ではないのか。車から降りた人が慣れた様子で神殿に軽く頭を下げている。その時気付いた。彼等がマチの神社の氏子なのだと。震災後地元の人々によって復旧された境内に一本の木もない神社さえある。私のムラの神社イメージを変える必要がある。マチのコミュニティ、これが現在の私の課題だが、マチは移動する人々によって形成される。人々は無方向に移動するのだろうか。旧生田神社と兵庫生田神社を結ぶとその直線上に生田神社斎神を祭る四宮神社と六宮神社がある。東から西に保久良、弓弦羽、綱敷天満、徳井、敏馬、三宮、走水、八宮、証誠などの神社がほぼ直線上に並ぶ。また、本住吉神社を中心にした円周上に徳井、東明、魚崎、山王、猿田彦などの神社がある。さらには四宮神社が中心の同心円があり、内円には五宮、八宮、三宮、現生田など生田神社関連の神社、外円には荒田、北野、小野の神社がのる。他にもこのような直線、円周がいくつもある。これらの直線、円周が持つ個々の神道的意味は私には分からないが、明らかにドールズ・ガタリのいう条里空間であることは間違いない。

復興を目指して新たなマチの空間を作り出そうとする時、丁度地震後の瓦礫のようにこれらの神社が示してきた条里空間を捨て去ってよいのだろうか。私はそうは思わない。検討すべき重要な神戸・摂津の設計モデルとして活かすことが出来るのではないだろうか。但しその際に、ドールズらのいう遊牧空間、多孔空間の機能を検討する必要がある。というのは、条里空間のダイナミックスはこれらの空間との関わりで生まれているのだから。

[問い合わせ先]

〒590-0035 堺市大仙町 2-1

府立大阪女子大学人文社会学部人間関係学科

藤田 正

TEL: 0722-22-4811

FAX: 0722-22-4791